

東常縁の家集並びに諸著作の考察

附・東家末流著作一覽

井 上 宗 雄

東常縁は、二条派の道統を伝えたと称せられる人だけあって、その著作といわれる書は頗る多い。以下、家集と、仮托されたものを含めて著作類についての考察を行い、併せて常縁の子孫の著作類にも一瞥を加えてみたい。

一、常縁の家集

1 常縁集の二類

常縁の家集は二類に分けられる。即ち、東(平)常縁歌(草)と題され、百七十五首程を収める第一類の諸本と、東野州家集または(東)常縁集と題され、約四百首を収める第二類の諸本とである。前者はすべて写本で伝わり、後者は刊本に類従本がある。

叙述の便宜上、類従本に番号を付すると、次の如くなる。

春1~53 夏54~105 秋106~163 冬164~286 恋287~334 雑335~

405 (上の内、373・375は息念の歌、391道虎の歌、402・404は常縁の発句、403・405は宗祇の付句である。)

第一類本には内閣文庫本・天理図書館^{旧竹柏園蔵}本・静嘉堂文庫^{三三四〇二一}本・書陵部^{七二}本・先代御便覧^{書陵部蔵}所収本等がある。先代

御便覧所収本の外は、いずれも末尾に東家代々々が付されている。諸本いずれも江戸中期か、それ以後の書写である。百七十五首を収める本^{内閣文庫本等}が善本である。歌数がそれ以下の本は脱落歌があると見てよく、またそれ以上の本、例えば先代御便覧所収本は百八十首を収めるが、重複追補歌を含んでいる。

第二類本には静嘉堂文庫^{三三四〇六一五}本・京大図書館本・書陵部^{二五二一}本・刈図書館本・神習文庫本・彰考館本・慶大図書館本^{類従本等がある} (この外に、第二類本と思しきものに、歌書^{縁覧}に^{みえる東元子館家本・旧宮内省御歌所本がある})。末尾の連歌を除き、四百一首を収める。

第一類本の歌は殆ど第二類本に含まれているが、この常縁集の二類は江戸中期以後の書写者に知られていたらしく、例えば第二類本の静嘉堂本には対校の注と、脱落歌とが記されている。

第一類本にのみ見えて第二類本にみえない歌を左に掲げておく。すべて十二首である。

梅

イ なれ／＼て春にをくれぬ物ならんはなに先さくやどの梅が

枝

口 ふく風はおもひおもはばむめがかをさそひつくしてのちし
うければ

ハ 吹をくるかたこそしらね春のよのまくらしづかに匂ふ梅が
か

ニ 梅がかにさとをばかれずとふとてや軒ばおよぶにすぐる春
風

ホ 春 月
さは姫のそむる霞の花衣色にぞ匂ふはるの夜の月
庭梅久芳

ヘ 春ごとの花に心やさそふらんむかしかはらぬ庭の梅が枝
忘暮春 為世より題を給ふ

ト いとまなみよに住む人やちるはなのくれ行く春をしまざ
らまし

秋 夕
なにとさて秋の夕は物ごとに我身のひとりかこちなすらむ
(成)

リ 野 月
武蔵野や山のはならで更る夜にはなる草の月も恨めし

初 雪
降そむる庭の白雪朝戸出のけふの心のはじめ成らむ

又 寝覚千鳥
うらざとへみえつる夢の面影に更にのこらで千鳥なくなり
(も)

懐 旧
いにしへに心はなご残らんたちもかへらずすぐる月日に

第一類本は刊本がないので、類従本に私付した番号及び上掲第

二類本にみえぬ十二首に付した記号によって、内閣文庫本の順序
のまに記しておく。

〔春〕 3 4 7 16⁽¹⁾ 5 9 8 イロハ、ニ 18 ホ 35 17⁽²⁾ へ 42 32 36 23 14 6 41 44 43⁽³⁾ 21⁽⁴⁾ 20

19 15 39 22 25 26 27 38 49 48 52 ト (計卅九首)
(1)天理本「文明十五年正月二日」云々と詞書。(2)天理本「文明
十五年正月十三日月次兼題」と詞書。(3)「春月屋形様お出の時永日
十五首のうちに」と詞書。(4)「雨中待花堂」と詞書し、初句「雲な
らぬ」とある。第一類本にも詞書を第二類本の如くにし(春
雨)、初句を「あふぎみる」とする本がある。(5)初字「あ」。

〔夏〕 56 55 57 58 59 60 64 63 73 67 74 78 79 103 101 88 95 86 (計十八首)

〔秋〕 106 107 109 130 136 チ 139 141 111 115 117 122 121 138 150 151 143 142 144 146 129 140 156 118 149 137 157

155 152 リ 162 120 (計卅二首)

〔冬〕 165 185 240 217 193 232 261 265 263 262 214 233 231 229 230 221 196 206 228 ル (計廿一首)

〔恋〕 323 324 229 310 312 322 303 306 309 331 301 300 298 287 332 321 291 334 288⁽¹⁾ 296 302 308 319 318 293 330 328

326 289 315 295 (計卅一首)
(1)初句「いひしらぬ」

〔雑〕 380 387 346 340 347 337 335 395 400 337 352 336 360 358 377 382 396 344 384 354 401 341 356 357 391⁽¹⁾ 392

342 383 349 353 351 345 339 (計卅四首)
(1)詞書「三月末の十日の初陣蒲庵老母遠行の事縁数に弔ひ侍る
道虎公」とある。

右の外、先代御便覧本には104 126 290 317 がみえるが、追補と思われ
る。

第一類本の多くには「東家代々首」が付されている。東風行よ

り常和に至る十三名の詠歌一首である。河村定芳氏の『東常縁』百廿に掲出されているが、第一類本に付せられているものは、胤行の歌は統後撰集六七「袖にのみ……」、氏村のは新後拾遺集四九「あくるをそ……」である。

右代々首二条家之歌道髓脳自為家卿平胤行受相伝代々歌道相続者也

天文二年五月上旬

平常和書之

と奥書がある(第一類の書腰部本には更に東家の人々の勅撰入集歌。をすべて掲出している。これが東家代々集である。)

第二類本には、類従本以外すべて奥書がある。成立問題に關して示唆する所が大きいので掲出しておく。

(イ)奥書A どの本にも付されているが、異同があるので、書腰部本により、他本はすべてイとして掲げる(京大國文研究室に「東野州全集序」という一紙を蔵し、この奥書と同一。但し「不。長風滅之云」まで。)

東野州常縁者起廢繼絶施功吾道甚大、其詠歌伝在人口者多々、余(見毎イ)毎見(なしイ)来(王紀イ)聞去記之第恨無全集、偶会其華胄遠藤備州守常友語及申事、渠亦以是為憂、乃搜索篋中被寄殘藥(被イ)膳(なしイ)馥(なしイ)一套、余合之遂編集終功自染充毫(毫イ)以書一冊、於是奉備 法皇御覽睿感不少、忝賜 宸翰外題、野州去世已久、幸沐聖恩益揚才名、

縱封侯伯諡文公、亦何異最底慰冥魂、余為此道後裔与備州同歡喜者乎、仍把彼一冊投贈備州守、只願伝于家(伝イ)于世不長泯滅之(云イ)

(宋イ)亡父卿成此草案未書了而亡失、余今因備州守求命筆與感而已(宋イ)

寛文十一初秋天

左大弁藤光雄

(ロ)奥書B 静嘉堂本・刈谷図書館本にある。

右烏丸大納言資慶卿以御自筆書写之

(ハ)奥書C 静嘉堂本奥に貼紙二枚あり、その一枚。

異本奥書

此一冊者以東下野守常和華翰書之、尤可為証本者也

寛文二年六月上流

烏丸資慶

(ニ)奥書D 同上他の貼紙。Bと同じ奥書に続いて遠藤家証本によって写したが、誤謬と思われる個所・不審の個所があるので、証本を求めたき由の、正徳五年及び六年の蓮阿の識語がある。尚、C・Dは異本奥書を転載したものらしい。異本とは恐らく第一類本か。

(ホ)奥書E 神習文庫本にのみある。

遠藤備前守平常友者常縁七世孫也、彼家集年久所持之、雖然集本混乱而不正矣、寛文九年初夏烏丸前重相資慶御下向江戸之時披見彼本、常友頻請清撰、此故彼卿上洛之已後遂清撰自書之、備 法皇御覽忝刺 宸翰染常縁集之三字賜外題、彼卿加奥書筆者賢息光雄卿也、余恩借彼卿自筆本以書写者也、

嘗時寛文十二壬子霜月日

観何居士 以范

以上の内容については後に触れる。なお第一類本はいずれも江戸中期頃の書写であるが、年代の明らかなものは、静嘉堂本宝永二年、刈谷本明和四年、神習文庫本文化四年である。

2 慈 恩 寺 本

歌数や奥書に小異はあつても、常縁の家集は上述の二類に属するのであるが、最近一見を許された岐阜県郡上郡八幡町慈恩寺の蔵本は甚だ体裁の異なる本である。卷子本二巻で、忠実な転写本が郡上高校に蔵せられている（昭和五年郡上高女の校長であつた太田成和）。氏は書家の北村栄一氏に筆写せしめたもの。私は主としてその転写本によつて調査し、慈恩寺本は一見したのみであるが、詳しくは河村定芳氏はじめ岐阜の方々の御報告を待つ事にして、一応調査の結果を述べたい。

一卷は題簽に「東常縁詠歌写 其一」とあり、内題は「東常縁詠歌写」、天地約三十二櫃、江戸初期の写、一首は二行書。巻初部分を掲げておく（番号及び記号は前述のもの）。

東家十三代集之内

387 へ東路や都のそらの恋しさに
ふけてなかわるよなよなの月

宗祇法師銭別のうた

380 へ紅葉々のなるゝたつたしら雲の
花のみよしの思ひわするな

外

27 へ朝なく雲たちそひて小倉山

みねふく風そ花の香をする

（例か）

文明十五年正月二日佳州の梅久為春友といふ題を

16 へなれきつる春をいくよの末かけて

かはらぬ梅のはひなるなん

第五首目には「同六日五首の題にて廿番の歌合侍しに」と詞書して34759の歌があり、以下会記はなく、8イロハニ18ホ34638404234732130136チ139141299ヌ2283529539732324が各題の下に収められている。計卅五首。奥に「右之分松平主殿頭殿御所望に付写遣也」と記されている（郡上高校本には太田氏の識語がある）。

重写之

当座二首 曉

335をのつからさむる夢ちや更夜の
かねよりさきのしるへなるらむ

祝

395へたてなき君のめくみやすなをなる
よにふる人のころならまし

第三・四首目は「卯月廿六日 小月次之会に」と詞書して103400の歌がある。この巻は会記あるものが多いので（題は第二類本と施）、それを注しつつ歌の番号・記号を掲出しておく。

315	95	288	396	221	310
73	120	296	へ ⁽⁷⁾ 36	231	109
79	240	15 ⁵⁸ 36	214	229	312
339	233	39	23	230	111
	217	356	23	309	322
	193	302 ⁶⁸ 14	6	360 ³ 36	115
	330	357	25 ¹⁷ 287	358	117
	349	25	49	*	122
	232	26	48	107 ⁽⁴⁾ 138	121
	22	391 ¹⁸ 48	344	139	150
	52	392	344	157	151
	101	59 ¹⁹ 67	74	155 ⁽⁵⁾ 303	143
	リ	64	74	377	142
	328	342	332	152	144
	326	335 ²⁰ 384	43 ⁹ 233	146	146
	261	395	103	44 ¹¹ 146	129
	265	400	321	88	140
	262	310	44 ¹¹ 146	156	140
	57	109	20	78	156
	289	312	291	60	86
	353	308	21	106	118
	351	319	354 ¹² 331	306	306
	58	165	ヲ	17	337
	63	185	401	301	149 ⁽²⁾
	345	383	341 ¹³ 300	352	352
	55	162	334	298	196
	56	318	19 ¹⁴ 382	206	206

- (1) 「人々てんの歌よみ侍りしに十五首の題を」
- (2) 「九月十三夜の暗といふ心を人々侍りしに」
- (3) 「よの中のすてやらぬ事のみなけき侍りておもひつつける」
* 「常縁御詠歌写 寛文元年六月十々写」とあり、書写の年月と
思われる。
- (4) 「同廿八日夜廿首をよませたまふうち」とあり、この教語法は
恐らく43の詠歌の如く、貴人を迎えての詠歌であらう。従つて
358とは続いていないのであらう。
- (5) 「毎月の会の八月十五日侍しに」
- (6) 「歌合のうちにねさめの千鳥と云心を」
- (7) 「同十三日月次」へが兼日、36が当座。
- (8) 「同廿九日小月次に題をさくりにて」
- (9) 「御屋形様おいでの時永日のつれづれのあまりに十五首の題の
うちに春月といふをかりて」守護土岐氏の来訪を意味するか。
- (10) 「同七日夜為世忘暮春という題をかりて」
- (11) 「来十三日兼日」。なお21は初句「雲ならぬ」。
- (12) 「同日の夜にいたりておのく三首をよめるに」
- (13) 「十五日の夜に」334「同夜」
- (14) 「十七日の会にて」
- (15) 「同廿日の夜」
- (16) 「同女三日夜」
- (17) 「同廿五日夜」なお26の次に「前の歌はいかにして此一本に時
雨けん山にさきたつ庭の紅葉々と侍るに似てやと侍れはをくを
いたし侍り」とある。25を指す(第一類本にも同)。
(左注がある)

(18) 「三月末の十日の初陣蒲庵老母遠行之事縁数にとふらひ侍ると
て道虎様より之御歌」

(19) 「卯月十三日兼日」

(20) 335〜312重複歌。308以下会記なし。

都合百四十七首、うち七首重複。奥書なし。

この阿巻は、其一の奥書及び其二の途中の「寛文元年」云々の
文によると、遠藤常友東家の子孫と稱する八幡城主が寛文初年に松平主殿頭の為
に書写したものであるまいか。この主殿頭とは、寛政重修諸家
譜によると二人比定しうる。一人は松平輝綱で、他は松平忠房で
ある。輝綱川越城主は板倉重宗女で、常友の母も重宗女であるか
ら、輝綱と考へたいが、彼は初名主殿、寛永十二年甲斐守に任
官、その点で輝綱ではないらしい。忠房は、寛文頃福知山城主で
あったが元祿に至るまで主殿頭を称している。忠房が文雅の道を
好んだ事は寛政の家譜に詳しく(最近明らかになされた高松松平文庫の貴重本
は寛文九年爲、)も多くの忠房が蒐集したものという。忠房
原に転封した、この松平主殿頭が忠房である公算は大きい。

この松平主殿頭云々と奥書のある書が、何故に慈恩寺に蔵せら
れているかは不明だが(歌書録質によると、東元子爵家に天文二年五月以後
であろうか。或は後に松平主殿、)或は何かの事情で主殿頭に贈呈しなか
ったのか、理由があるのであらう。とにかく親本の遠藤家本歌書
子爵家本かから寛文頃に転写されたものである。

所で、この慈恩寺本の其一と其二とは続いたものであるか否か
不明であるし、其二も「寛文元年」云々の前と後とは一応切れて
いるとみられるし、また其一の冒頭の部分のように後人(常縁以後
の意味)

の補訂とみえる点もあり、この親本が已に一貫したものではなかつたらしい。しかしながらこの残欠本によって想像される事は、常縁には歌日記日次があったらしい事である。几帳面な常縁の事であるから、師葬孝のような歌日記慈恩寺本があった事は当然であろう。その断簡が遠藤氏に残っていたのであろう。

3 慈恩寺本・第一類本・第二類本の成立

慈恩寺本と第一類本とが密接な関係あるらしい事は、夫々の所収歌百七十五首が完全に一致する事、歌題を取扱った部分慈恩寺本の会記も殆ど一致する事によって明らかである。

ではどちらが先に成立したか、という問題であるが、詞書は慈恩寺本が正確で、第一類本はそれを要約したと思われるものが多い。最もはっきりしているのは、第一類本に「忘暮春為世より」号ト前掲記とあるのは不審であるが、慈恩寺本には「為世忘暮春云」よのためほしゅとあり、意味がよく通ずる。又、家集で、編年体のものと部立してあるものとは、部立本が後に成立したと考えるのが普通である。従って第一類本は慈恩寺系の本に基づいたものであろう。

次に以上両本の成立を更に具体的に考えてみたいが、それには前掲第二類本奥書の助けを借りる必要がある。

奥書Aは、末尾近くの「不長泯滅之(云)」までが烏丸資慶の奥書である事が、京大国文学研究室蔵の「東野州全集序文」によっても窺われるが、即ち資慶はかねて常縁の全集のない事を恨み、常縁の伝在人口歌等を集めていた。たま／＼遠藤常友に逢ってそ

の話をした所、常友蔵の常縁「残蘄贍腹」を贈られたので、それらを合して「遂編集終功」というのである。かくして成ったのが類従本第二類本らしい。従って常友蔵の「残蘄贍腹」というのは第二類本の一資料となったもので、それは前奥書C・Dによって恐らく寛文二年に写した東常和の常縁詠遠藤家証本東元子題であったのであろう。

所で、その前年の寛文元年には、常友は松平主殿願の為に常縁の日次詠草本断簡を写しており、僅か二年の内に、常友蔵の遠藤家証本常和筆は忠房と資慶に書写された訳である。そしてその忠房への書写本と近い関係をもつて慈恩寺本が転写されたと推測される。恐らく資慶への本というのも同じ本(＝慈恩寺系の本)であったと考えるのが自然であらう。

慈恩寺本の同系の資慶書写本が一資料となって常縁全歌集が編まれる。その過程において日次形式の詠草が部類されたのであろう。即ち資慶の集めた常縁詠の多くは年月の分らぬものであったろう。従って会記を多く有する慈恩寺本の如き形で全集を編む訳には行かない。そこで資慶は日次形式の詠草慈恩寺本と同系のを、全集を編む為に、一々は日時を記さずに類題したのではなからうか(たゞ天理本の上には二箇所に「文明十五年」云々と年次みえる本もあるが、資慶は完全には日時を取扱わず、その後、次第で整理されたものかもしれない)。そして現在みる如き第一類本が成立したのであろう。

要するに第一類本というのは、慈恩寺系の本を烏丸資慶が寛文頃、全集第二を編む一資料として部類した本であらう、従ってそれは、常縁の晩年と思われる一時期の作品が主となっているものである。

次に第二類本の成立であるが、これは奥書A・Eを併せ考える事によつては明らかである。即ち上述第一類本成立の経過を辿り、また資慶が他に蒐集して来た常縁の詠を合して、寛文九年夏・秋頃に一書をなし、後西院に見せて「常縁集」なる外題を与えられた。所が資慶はその年十一月に没したので、息光雄が常友の請もあつて一、二行の識語を付して完成したのである。即ち第二類本は、いわば常縁全歌集を目的としたものである。

(常縁日次詠草 多くは散佚か) (遠藤家証本 常和自筆本か。常友蔵。東元子爵家本?)

寛文元年
(松平主殿頭への書写本?) — 慈恩寺本

寛文二年?

(烏丸資慶書写本) — (資慶部類) — 第一類本

(資慶蒐集の常縁詠歌)

第二類本

附記Ⅰ。第二類の本には興味ある付録を載せているものがある。簡単に紹介しておく。

○静嘉堂本。東家系図 遠藤家系図を含む が付されている。

○神習文庫本。東家系図及び脱漏歌五首 歌集所収のものではなく、書写者の贋目しらしい常縁の詠 を付している。

○刈谷図書館本。初めに勅撰東家十三代首・素山状之写 東家素山消息本で、東野州聞書之拔萃・百人一首奥書・東鑑抜書があり、次いで家集、末に東家系図を付す。東家詞華集の体裁を為している。

附記Ⅱ。続扶桑拾葉集三・八州文藻に、提宰相為門なる者の記した

宮羽集奥書 元龜三年五月上旬 というものが収められている。「東野州聞書同物敷」と注があり、文中には「歌道宮羽集は東下野守正五位下平常縁朝臣の秘冊なり」とあつて、詠草か東野州聞書か不明である。本文は現存せぬようなので、しばらく疑いを存しておく。

附記Ⅲ。貴重な御藏書の閲覧を許された郡上高校・慈恩寺、並びに種々の御便宜を下さった河村定芳・畑中浄園両氏に深謝致した。

二、常縁の著作

1 東野州聞書 日本歌学大系の解題に見える如く、広本と略本とがある。堯孝歌話と題せられるものもあるが 内閣文庫本 上述二系統の外に異本はないようである。前半 巻三の中頃まで は正徹・堯孝両者の歌話が中心であるが、後半は正式は堯孝門に入ってからであり、殆どが堯孝の説を録する。従つて二条派的な見解が極めて強い。なお常縁自身の感想や、兄安東氏世から聞いた挿話なども混り、宝徳・享徳頃の歌壇史研究の好資料である。

2 拾遺愚草の注釈書 管見に入つた常縁注と称する拾遺愚草の注に三種がある。

(1) 拾遺愚草抄出聞書 内閣文庫蔵。六百八首の評釈。奥に「此抄常縁聞書云々、以飛鳥井羽林御本遂書写校合早 文祿四年十一月十八日玄旨判」とあり、更に寛文四年流壺子の識語がある。恐らく大部分は後世の増補であろう。

(2) 拾遺愚草抄出聞書。約二百首の注釈。静嘉堂蔵。彰考館蔵の拾遺愚草難歌二百首註 見末 も同本と思われる。また陽明文庫蔵の

『歌註抄』と題されている書も同本である。静嘉堂本には頼阿：堯孝相伝の説を記したと言うが如く解せられる四十六字の難解な奥書があり、

康正二九月十三日

文正三四月十八日

常縁在判
素純在判

とある。陽明文庫本には「文正三」は「永正三」とあり、これが正しい（陽明文庫本の奥書は虫損で判読し難い。また、（康正三）の下に常縁在判とは記されていない）。陽明文庫本は室町末期の写本と思われるが、末尾に「天文七年卯月日借筆写了常縁講説」云々の環翠軒（船橋の環翠軒）の識語がある。但し内容が確かに常縁の注釈であるか否かはにわかに決し難い。

（常縁口伝和歌。書陵部蔵。彰考館本は題簽「拾遺愚草」、内題「拾遺愚草之内」。板本は『東野州拾唾』と題する。十二月十八日付宗祇宛書状を付す。文明十四年に宗祇の請によって記したものの。難歌五十八首の注で、常縁の注である事は確かである（圖書寮藏解題参考））。

3 新古今集聞書鈔新 二種類ある。細川幽斎の増補本と原形聞書とである。前者は写本又は板本で伝わり、無年月の常縁奥書、文明二年の宗幸奥書、慶長二年の幽斎奥書がある。それによると、

常縁が先人（堯孝・正徹）の説を中心として注釈し、文明二年に宗幸が書写したもので、成立は文明二年以前の某年という事になる。後者の常縁の原形聞書にも肖柏や素純の名がみえ、後人の書入も混っているらしい（『国語文学研究史大成・新古今集』、『説林』）。

この注釈は東野州消息（後述）と前後して成ったらしいが、消息は東国において、恐らく文正頃記されたらしいので、常縁の注釈が行

われたのも、その頃であろうか。

4 古今集の注釈書 第一に古今集両度聞書が挙げられる。常縁

の注を宗祇が聞書したもので、初度は文明三年正月廿八日―四月八日、後度は六月十二日―七月廿五日。翌四年五月三日常縁は一見して加筆し、更に奥書を記した（講釈の行われた場所は美濃と伊豆）。

この書の根幹は常縁の講釈であろうが、宗祇の増補もあるらしい。例えば、巻十九の長歌「これを思へばくだものの……」の条で「一条禪閣の御説は」と記しているが、兼良が禪閣と称されたのは文明五年夏以後である。

常縁はこの後も何度か宗祇に古今講釈を行つたらしい（宗祇法師歌）。書陵部蔵『古今和歌集』三八〇（内題は『古今秘伝集』）の中に

古今集之事初度

文明三年八月十五日以相伝説伝受僧宗祇早

從五位下平常縁判

文明五年四月十八日古今集之説悉以僧宗祇仁授申早、心於堅横仁懸天此文於可守者也

八代末葉下野守平常縁判

とある（吉沢義則『室町文学史』には古今集一本）。次いで九年四月切紙を伝えた（後述）。なお文明三年後度の講釈は上総の人犬坪基清に講じたのを宗祇が同聴したのであるが、常縁は基清に文明五、七年古今集を伝えている。他に素曉・胤道・宗順・信秀らにも古今を伝授したという（『神宮文庫蔵『秘抄』・京大國文研究室蔵『古』）。

『内外口伝歌共（秘）』（書陵部蔵）という書がある。古今集中の秘歌廿四首を常縁が宗祇に授け、宗祇が実隆に伝えた。実隆は明応元年

八月奥書を記している（伊地知鉄男氏「宗祇の古典研究」國語國文昭和十二年四月、國書纂要解題類文学篇参照）

そのほか古今集の仮名序のみを注した書に常縁作と伝えるものがある。即ち『古今集序注』（竹柏園旧蔵、天理圖書院蔵）がそれである。阿度聞書の解釈とはやや異なる。末尾に「説進候之趣無相違 常縁判」とある。琴山の極札に近衛植家筆とあり、室町末写なる事は確かである。常縁が何時誰に講じたものであるか、などの問題は更に考究を要する（『竹柏園蔵』書志参照）。

5 百人一首抄（註） 奥書によると、文明三年古今講釈の時、或る人の発起によつて常縁の講義があり、宗祇が同聴したものである（文明十年四月）。この書は已に有吉保氏が指摘された如く、応永十三年藤原満基の奥書を持つ『小椋山庄色紙和歌』（書院部蔵）と同じ内容の書である。思うに

頼阿——経賢——堯尋——堯孝——堯恵——
良基——師嗣——満基——常縁——宗祇——

という経路で伝わったものではあるまいか。即ち常縁は師説をそのまま宗祇に伝え、宗祇も忠実に聞書したのである。

6 その他 以下は常縁の述作というにはかなり問題のあるものである。

(4)伊勢物語抄（註）。これは文明十一年二月宗祇が宗親に聞書せしめたもので、某の識語によれば宗祇が常縁に歌道を伝受した時に講ぜられたものという（古註聚の研究参照）。東家が伊勢物語の古本を伝え、常縁が伊勢物語の講釈を行った事は確かであるが、宗祇も、伊勢物語は古註をはじめ兼良その他からの影響を多く受けているから、この書が常縁の説そのままであるとは勿論いえない。

(4)未来記・雨中吟抄。宗祇は明応元年十二月、実隆らに未来記・雨中吟を講じた。実隆公記に、宗祇の持参した一書は「未来記（遠情抄）」とみえる。書院部に実隆自筆本の遠情抄が蔵せられているが、奥書は次の如くである。

右宗祇法師聞書也、東常縁一覽之処、称神妙之由号遠情抄自書銘与之云々、此本則所押彼銘也、先年講談之後、予聊雖有抄出之事、重而惜請此本令書写者也

明応四年三月十八日

（実隆（花押））

常縁の講釈を宗祇が忠実に聞書したものに常縁が加証奥書を記したと解せられるし、また宗祇の注に感嘆して常縁が外題を与えて染筆したとも解せられる（歌書綜覧は「後者とする」）。未来記・雨中吟の注釈で、和歌三部抄の一、板本がある。

(4)自讃歌抄（註）。歌書綜覧に常縁の作とあり、「延徳四壬子孟春日於長安書之」と奥書ある由を記している（日本文学大辞典にも同じ模様の奥書ある書を掲げているが、延徳が正徳とな）。管見に入つたものに静嘉堂本（江戸）があり、同じ奥書載せているが、常縁の名はなく、常縁の著であるという明徴はないし、真作ではない。この抄は一首につき二つの注を掲げ、詳注であるが、一方は次に述べる宗祇の注とはほぼ同じである。因みにいうと、延徳四年六月には兼載も自讃歌注を聞書している（内閣文庫蔵本）。

宗祇の抄（写本）は奥書によると文明十六年某の発起によつて行われたもので、「粗これを記し愚意をのぶるなり」とあるから、常縁からの聞書ではない。因みに荒木良雄氏は、新古今集聞書とこの自讃歌註とにみえる同じ歌の評注を比較され、宗祇のそれは、常縁の評釈をふまえてつ更に押しつめ明瞭ならしめている所

がある、と述べておられる(『宗』)。

(二) そのほか常縁著作というものに、素伝懷中抄・和歌当務抄以上源氏一郡七穴堀・河村氏『東常縁』に掲出。未見。後者は歌書常縁實には永無常縁の成作。より本歌となるべし。歌読大事 天理圖書館蔵。素伝が素伝(常縁)より伝えられた歌き歌を抜いた書。田明とは再昌草永正二年にみえる人物かなどがある。なほ明らかに常縁に進上の由がみえる。又は後人の想像によって常縁作とされたものは頗る多い。一、二例のみ掲げると、古今秘伝集書院部蔵。前述廣三八〇。古今集見恩記抄の選。古今和歌集の大事以下、古今伝授に關する素純の選。古今天真独朗之巻に伝わつてきた書の旨を記した奥書がある。があまり。

7 常縁の書状・切紙

(イ) 東野州消息。十月二日付宗祇宛。年時不詳。荒木良雄・河村定芳氏は文正元年、伊地知鉄男氏は文明三、四年の頃とされる。新古今集聞書との関係から推して文明二年以前か、俄かに決しがたいが、或は文正元年か。存義。群書類従所収。

(ロ) 三月三日付宗祇宛書状。書院部蔵。文明九年か。伊地知氏紹介「宗祇の古」。

(ハ) 文明十四年十一月十六日付宗祇宛書状。常縁口伝和歌に付される(圖書集成解題)。

(ニ) 極月十八日宗祇宛書状。文明十四年。大日本史料所載(後半部は題統文学解題。編にも紹介)。

(ホ) 文明九年四月五日付切紙。大日本史料所載(東山文庫蔵。研究史大初雁文庫にも)。

聞書について

以上、常縁の著作を見ると、「聞書」と題されるものが多く、しかもそれには種々の意味のある事が知られる。書名に聞書と題する事は必ずしも受講者が付したのではなく、流布している間に自然に聞書と呼ばれてくるものも多かったらしいが、室町期以後に大変数が多くなる。

聞書には大別して二種がある。

(1) 主として歌論・歌話に関する事を師から打聞筆記したもの。更に二類に分つ。

(イ) 師の言説を忠実に弟子が筆録したもの(徹書記物語正徹正伝本に正伝筆。清庵茶話正徹正伝以下多し。)、(ロ) 数人の人々の言説を筆録したもの(古くは井蛙抄、下って東野州聞書・兼載雑談等、以下多い筆録者の意見も)ことである。

(2) 主として古典の注釈を筆記したもの。

師の説師が先人の説を又又は師の相伝所持本をできるだけ忠実に筆記したものが、正確には聞書と称せられるべきであろう。百人一首抄・新古今集聞書等がそれである。それを師が一見し、補筆し、加証奥書を加えるのが普通である。秘説口伝は記録しないで別紙に記すのが後に切紙伝授として確立する。

右の如き聞書に、後になって筆録者が自説乃至は第三者の説を混入せしめて流布させる場合がある。古今集兩度聞書は混入度の少ないものであろうが、善意に、又は故意に多くの不純物を混入せしめるものも見出しうる。

従つて聞書類の著者をいう時には「某説某録」の如く記すべきであらう。

附・東家末流歌書類著作一覽

(1) 縁教常縁 顯文「奉施入白山大御前古今集一部」。所謂伊達家本古今集の奥書にあるもので、宗順房・常縁と伝わった古今集俊成を、文明十七年六月長滝寺に奉納した時のものである(美濃國長南史料郡上瑞・郡上郡史・河村定秀氏・東常縁に掲載)。常縁が文明十六年頃没したという傍証となる資料。

(2) 常和常縁次子 文明末以来、関東に住んだらしい(北園紀行・実隆)。常縁詠草第一付載の東家代々首の奥に天文二年常和の名がある。常和者か(やや疑いは残る。実隆公記によ)。

(3) 素純 延徳三年伊勢宗瑞の堀越攻略によって流浪し、明応四年上洛、宗祇から伊勢物語・詠歌大概・古今集の講釈を受け、次いで東下、富士本宮の東傍みたらし川に住んで、明八年末『かりねのすさみ』を著した。問答体による歌学書(日本歌学大系・統)。

今川氏の庇護を受けていたらしく、永正十三年八月氏親を助けて統五明題和歌集を撰んだ(圖書寮典籍解題)。明応四年宗祇から受けた古今の説を、大永三年に諸説を加えてまとめた。東洋文庫蔵『古今和歌集抄』十冊がそれである(書後部「古今秘伝集」)。祇説・又説・愚説等々、多くの説を引いた古今集の詳注で、恐らくは子の素経に伝えたものと思われる。奥書を掲げておく。

宗祇公は亡父に此道伝受の人也、第一之門弟たる由の支証在之、然に素純豆州に侍る比伝受の分可相渡上治いそぎ候へと度々消息有といへども兎角月を送しに、豆州思の外なるみたれ出来て、爰かしことさすらへ行まきに、是こそ能折ふしな

れと明応第四天卯卯月上旬のころ為此事云々、上洛早時しも新撰菟玖波集と云連歌の勅撰のころにて、祇公いとまなかりければ卯月廿三日より先伊勢物語詠歌大概をよまれける也、其後は連歌撰の事斗にてやうやうくいとま事経て、六月五日辰時よりそ古今始之、七月下旬之比閑終早、愚聞書之外祇公聞書所々書載、又亡父に一部之注祇公所望其分所々書加、又或説不違庭訓有奥儀書加一部之説不可過之、於切紙口伝等者別帖注之、此内中院並相より素遍法師直伝之説有之、切紙以下各別也、是は賢兄頼数伝受早

大永三年末十月

十代末葉素純

なお宗祇が素純に切紙等を伝えた事は宗祇終焉記に所見。なお右の奥書と『かりねのすさみ』の冒頭とを見合せると、素純が常縁の子であった事が判明する。これによって文明三年風を煩った竹一三馬千句、文明十四年十一月十八日付書状にみえる「小僧」が素純である可能性も生じてくる。なお永正三年に拾遺愚草の注を書写し、某年に円明殿へ歌詠大事を伝えた事は前述の如くである。米原正義氏の御教示によると、素純は常庵龍崇の兄であった。享祿三年二月、実隆は素純に請われて素純百番自歌合の判及び判詞を記した。奥書によると三月素純の許に到着(統類従所収。実隆公記・再昌草参照)。引続き駿河に居住していた。享祿末年か天文初年に没した(実隆公記・再昌草)。素純の古今和歌集の大事なるものが古今秘伝集(天文二年六月の集)。素純の古今和歌集の大事なるものが古今秘伝集(前記・書後部)に収められている。

子の素経もやはり今川氏に仕え、実隆に古今伝授を受けた(実隆公記・再昌草・言継・再昌草・言継)。

(4)素山 伝不明。東系図には、素純の孫、素経の子とあるが疑わしい。消息^{後述}に「諸国流浪七旬ニ及ブ」とあり、これによると明応頃の生れである。「東素山消息」は將軍義輝横死の後に記されたもので、永祿八年七月^{説通}・同九年七月^{平泉澄氏及び郡上郡史の説きこれが正しきか}の二説がある。平泉澄氏も指摘されている如く(四・五月郡上と穴馬)類従本は冒頭の欠けた悪本である。完本は『郡上郡史』及び河村氏の『東常縁』に掲出されているから、それとの対照が必要である。なお管見に入った写本を掲げておく。

刈谷図書館蔵東野州家集付載本・静嘉堂文庫蔵勅撰東家十三代集所収本・濃北一覽所収本(濃北一覽は幕末に小川休和の編した)・八洲文藻所収本(八洲文藻は書陵部・彰考館文庫蔵。消息は類従本と同系)

右の写本には、消息の終りに近くにみえる「祖父常縁朝臣」の「祖父」がなく、刈谷本には「朝臣」がない。また日付に、濃北一覽本は七月三日となっており、そのほか字句の異同は頗る多い。

以上のうち常和・素純等には、その名のみえる写本類も多い。東家の子孫は、系図によって異同があり、血縁関係の確定し難い者が多いが、その伝記考証は別の機会に試みたい。

なお東家出身の五山僧江西竜派・正宗竜統・常庵竜崇の作品は、玉村竹二氏の『五山文学』に一覧掲出され、各伝記・解説は、北村沢吉氏の『五山文学史稿』等に付せられている。

付記 別に「東常縁に関する基礎的考察」なる小論を発表したが(『文学・語学』、その統篇としてまとめてみた。各作品の内容的な

系統づけは今後の課題として残したが、それにつけて思う事は、常縁―宗祇の聞書と称せられる古今・新古今・百人一首・自讃歌・秀歌体大略などの注釈書には、相互に同じ歌が採上げられており、それらの評注を比較検討して系統づけを行う事の必要性である。例えば伊地知・大津・荒木諸氏の論考にみえるが如き方法を、一層組織的に行つたならば、中世和歌史の学統が、より内部的にとらえられるであらうし、また中世歌学発展の形態が一層具体的に探りうると思うのである。

上掲拙稿「東常縁に関する基礎的考察」において、常縁の確実なる事蹟は文安六年―文明十五年の間が分明である、と述べたが、常縁は文安五年二月藤原氏保の為に『定家仮名遣』(国語学系所収。山田孝雄『国語学』を写した書)に従つてその分明なる事蹟は一年さかのぼる。なお広島大の黒川昌享氏の御教示によると佐賀市の報徳会にその頃の写本が蔵せられている由である。

最近豊富な蔵書で話題となっている島原の松平文庫にも常縁集一本を蔵する由である。なお島原松平家に常縁自筆の後撰集が蔵せられていたが、戦災で焼失した由である。常縁自筆の拾遺集^{共二年}が書陵部と蓬左文庫に蔵せられる如く、常縁は後撰集をも数本書写したのであらう。上述松平文庫蔵本については今井源衛・島津忠夫両氏の御教示を得た事を感謝したい。

『先代御便覧』(六)に、東家の人々の勅撰集の詠をすべて抜き出した書(東家代々集)が収められ、「天文二年五月下旬」の年月が記され、次に奥書Cと同文の寛文二年奥書がある事を附記しておく。